

卒業研究プロジェクトのふりかえり：ある初任教師のナラティブ

○鈴木真理子（滋賀大学）・○木下 裕也（高島市立今津東小学校）

はじめに

第一著者の勤務する教育学部では、他の教員養成課程に似て、附属学校園やその他の学校園、教育委員会、各種施設と協力し、多様な教育実習やボランティア活動、インターンシップ活動への大学生の参加を促し、4年間を通して、学ぶことと教えることにかかる経験にもとづいた実践的知識と、キャンパスを中心に展開される授業で学んだ理論的知識の統合を図るカリキュラムが用意されている。最終学年の4年生で卒業研究活動を行い、大学生はそれまでの在学期間に経験し、学んだ知識を総括し統合する。

第一著者は教員養成課程を、大学生が教師の「実践の共同体」(Lave and Wenger, 1991) に周縁的に参加できる場ととらえ、教師の卵としての大学生の学びを支援する方策を講じてきている(鈴木, 永田, 2007)。そこでは、大学生自身が既習の知識や新たな知識を統合し、「内容と教授方法についての知識 (Pedagogical Content Knowledge) (以降, PCK と記す)」(Shulman, 1987) を再構築することをめざし、face to face のインタラクションに加え、ICT を活用してクラスメイトや先輩や学校教師、領域の異なる専門家など他者と電子的にインタラクションする環境も授業に埋め込んできた。ソーシャルなやりとりにも重きを置いた学びの可能性については多くの研究者が論じてきている(例えば、鈴木(2006)に概略)。

このような授業を組み合わせ、2007年度は中等理科の「教職に関する科目」の授業群を表のようにデザインした。このデザインのねらいは、大学生が附属学校や公立学校での教育実習の前に、既有的実践的知識や理論的知識、新しい知識を統合して彼らのPCKを豊かにし、エキスパートの教師に出会い、教師の卵としての成長を促すことにあった。なお、表中には実験・観察という言葉が挙がっており、この点が理科という教科の特徴と言える。

表 2007年度の中等理科の「教職に関する科目」に分類される授業群の概要

| 学期 授業 | 授業のねらい | 受講生の学習活動 | 授業担当者 | 授業中の ICT活用 |
|--------------|--|---|---|---------------|
| 春 授業 1 | (主に)教育実習前の受講生が、理科の学習指導案を作成できるようになる。 附属中学校教諭と知り合い、事例から経験的知識を学ぶ。 | グループで理科の学習指導要領と教科書を分析した後、各自で学習指導案を作成し、クラスメイトからのコメントをもとに学習指導案を修正する。 附属中学校教諭の講義を聴く。 | 教科教育教員 1名 附属中学校教諭 1名 (2時間) | ○ |
| 春 授業 2 | (主に)教育実習前の受講生が、理科のマイクロティーチングを実施し、リフレクションすることができるようになる。 | より身近な実験・観察を組み込んだマイクロティーチングを実施し、クラスメイトや中学校教師からのコメントをもとにリフレクションする。 | 教科教育教員 1名 | ○ |
| 秋 授業 3 | (主に)教育実習前の受講生が、理科における各種メディア活用の事例を学び、科学技術関連機関やマスメディア等が提供するデジタルコンテンツも利用して、ICTを活用した授業をデザインできるようになる。 附属中学校教諭と知り合い、事例から経験的知識を学ぶ。 | 大学生でも理解が難しいと言われるトピックを各種メディアを使って学んだ後、学習者としての経験を活かして課題解決を支援する教材 (ICTを含む) を制作する。 附属中学校教諭の講義を聴く。 マスメディア関係者の講義を聴く。 | 教科教育教員 1名 附属中学校教諭 1名 (1時間) マスメディア関係者 1名 (1時間) | ○ |
| 秋 授業 4 | (主に)教育実習前の受講生が、物理・化学・生物・地学領域のより専門的な実験・観察を組み込んだマイクロティーチングを実施し、リフレクションすることができるようになる。 | (主に)教育実習前の受講生が、物理・化学・生物・地学領域のより専門的な実験・観察を組み込んだマイクロティーチングを実施し、大学教員からのコメントをもとにリフレクションする。 | 教科専門教員 4名 (物理・化学・生物・地学領域毎に1名ずつ) | — |

研究の目的

本研究では、ここまで述べてきた学習環境で学び、卒業研究プロジェクトで博物館と学校との連携役としてふるまいながら、コアメンバーとして博学連携プログラムを開発し、実施し、実践研究(木下ほか, 印刷中)として発表した第二著者を共同研究者として迎え、教師の初任者として大学での卒業研究活動から就職後まで1年余りの段階的なふりかえりにおいて、「教えること(子ども・教材内容・教授法)」

「他者とのインタラクション」「教師という職業」について第二著者自身のイメージがどのように変わったか、そのきっかけは何だったのか、現在の自分にとって卒業研究活動がどのような意味をもっているかを協調的に記述する。一つの事例という限界はあるが、この記述をもとに就職前の職能発達 (professional development) (以降、PD と記す) 支援をめざした、大学におけるプロジェクトベースの卒業研究活動のあり方について検討する。なお、教育実習前後の大学生の授業や教師や子どものイメージの変容に関する研究 (例えば、三島, 2007) や、就職後の初任教師の実践イメージの変容に関する研究 (例えば、深見, 2007) はあるが、就職後の初任教師が大学在学中の卒業研究活動をふりかえって記述した事例はほとんど見られない。

研究の方法

本研究では、ナラティブの方法の一つである物語 (story-telling) (Connely and Clandinin, 1988) を採用し、第二著者が初任教師として物語る一人称の記述を、第一著者が促し、主に第一著者がその記述を解釈した。まず、以下に述べるナラティブの枠組みを第一著者が提示した。そして第二著者が、1) 卒業論文活動が本格的にスタートした 2006 年秋から初任教師として働いている 2007 年秋までを段階的にふりかえり、2) 「教えること (子ども・教材内容・教授法)」「他者とのインタラクション」「教師という職業」についての自分のイメージについてメタファーを使って喩え (石戸, 1994)、3) イメージの変容する場面についてはそのきっかけを可能な限り述べ、4) 現在の自分にとって卒業研究活動がどのような意味をもっていたかを記述した。以下に示すように、第一著者と第二著者が協同で記述と解釈を繰り返した。第二著者の記述に第一著者がコメントし、必要に応じて第二著者が記述を再構成した。同様に、第一著者の解釈に第二著者がコメントし、第一著者が解釈を再構成した。

結果の抜粋

この研究を通して、多くの人とかかわることができたことをとてもうれしく思う。誰もが子どもや教育に対する熱い気持ちを持ち、子どもたちとかかわっていた。そんな姿を見て、「博学連携」の前提にあるのは子どもたちだということに気付かされた。これまでは大学という世界の中で子どもと接する機会がほとんどなかった。しかし春になり、大学から一步出るとそこには子ども中心の世界が広がっている。

(略) 子どもの目線に立ち、学校や教育を見つめよう。そういう気持ちにさせてくれた。そして私自身、もっと成長したいと感じるようになった。(記述例)

謝辞 博学連携プログラムでご協力くださった琵琶湖博物館の中村公一先生、中野正俊先生、大津市立雄琴小学校の木下孝弘先生、O 小学校の生徒の皆さんならびに先生方、プログラムの実施当時滋賀大学教育学部に在籍していた大谷光平さん、安部亜沙子さん、中村聡太さんに心から御礼申し上げます。

付記 本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 (課題番号: 17011042, 代表: 鈴木真理子) と基盤研究 (C) (課題番号: 18500662, 代表: 鈴木真理子) の助成を受けている。

参考文献

- Connely, F and Clandinin, D. (1988) Teachers as curriculum planners: Narratives of experience. New York Teacher College Press
- 深見俊崇 (2007) ある初任教師の実践イメージの変容: 1年間の事例研究を基に. 日本教育工学会論文誌 30(4), 283-291
- 石戸教嗣 (1994) 4章 教師の子どもメタファー. 稲垣忠彦, 久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会, 69-83
- 木下裕也, 中村公一, 中野正俊, 木下孝弘, 鈴木真理子 (印刷中) 琵琶湖博物館と連携した体験学習プログラムの開発と評価—小学校社会科「くらしのうつりかわり」を題材に—. 滋賀大学教育学部紀要 I: 教育科学, 57
- Lave, J. and Wenger, E. (1991) Situated learning: Legitimate peripheral participation. Cambridge University Press (佐伯胖 訳) (1993)
- 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書
- 三島知剛 (2007) 教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容. 日本教育工学会論文誌 31(1), 107-114
- Shulman, L. S. (1987) Knowledge and teaching: Foundations of the new reform, Harvard Educational Review, 57(1), 1-22
- 鈴木真理子 (2006) 科学領域における共同学習に関する研究. 風間書房
- 鈴木真理子, 永田智子 (2007) 明日の教師を育てる. ナカニシヤ出版